

学校訪問記 特色ある教育を行う学校

世界で活躍できる

発信力のある日本人の育成をめざして

学校法人森教育学園
岡山学芸館高等学校

岡山学芸館高等学校

岡山駅から東に電車で17分、最寄りの西大寺駅から徒歩7分の静かな立地に岡山学芸館高等学校があります。

学校法人森教育学園は、昭和35年に森嘉吉先生が創立した西大寺女子高校を前身とします。41年に岡山学芸館高等学校と名称変更をすると同時に男女共学とし、普通科に加えて、衛生看護科と日本の私立高校で初めて英語科を設置しました。創立者の森嘉吉先生は「これからの英語は、洋書を読み解く力だけではだめだ。読んで書いて聞いて話せる、バランスのとれた発信力が求められる時代が必ずやってくる」と43年には海外留学制度を創設し、英語科第一期生がアメリカに留学しています。

その後、現理事長の森靖喜先生に校長が代わり、「英語教育」に力を入れながら学校運営を行ってきました。平成24年に現校長である森健太郎先生が就任し、27年には文部科学省の選定するSGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校に採択され、現在も難関国立大学や難関私立大学を中心に卒業生を輩出しています。

【入試広報・入試制度】

岡山学芸館高等学校の特徴として受

験生の専願率が高いことが挙げられます。一学年450名のうち420名が外部受験で入学しますが、そのうち310名（約75%）が専願（第一志望）です。総受験者数も増えてきていますが、それ以上に専願者数の増加が際立っています。

専願には①部活や英語など明確な目的があつて学芸館を専願してくる受験生②専願受験による優遇措置を受けた受験生の2通りがあります。以前は②の専願受験者が多かったのですが、最近は優遇措置（加点）を受けても合格できないほどにレベルが上がっており、①の専願が増えていきます。

入試情報の発信は①オープンスクール②SNSを中心に展開しています。オープンスクールでは参加者に「先輩への憧れ」をイメージしてもらつたことを意識し、先生方はあくまで裏方に徹し、受付・誘導・司会など運営のすべてを在校生が行います。年に三回ほど土曜日の午前中に開催され、毎回保護者を含む1000名程度が参加します。この機会に学校の全て知ってもらつても、「もう少し知りたいな」というレベルで留めておくため、あえて「三時間という短い時間設定にしています。

そこから先はSNSで情報キャッチアップしてもらつような形にし、情報を頻繁に更新することで、最新の情報を確認してもらい、入学前と入学後のイメージの不一致を起こりにくくしています。



外国語講師による「英語教育」

その他にも主要な部活動を体験できる「部活動オープンスクール」、地域（主に遠方）に出張して行う「地域別説明会」、「土曜授業見学会」などがあります。中学校への訪問やチラシを配るタイミング、担当の方への渡し方まで年々試行錯誤しながら緻密に行つており、良い効果があつたものを積み重ねていった結果、以前と比べて、より多くの受験者・保護者に参加してもらえようになりました。

入試制度は極力シンプルに英・国・

数の三教科の点数に加えて、調査書と受験態度を総合的に判断しています。

以前は面接を行っていましたが、受験生・教員双方の負担が大きいに、短時間で正確に判断することが難しいため廃止しました。また、入学試験時は教員の「情報の共有」を意識しており、教室の担当の先生以外に数十名の先生を配置し、インカム（無線）を使って体調不良の受験生などに迅速な対応ができるように体制を整えています。

【5つの科・コース】

岡山学芸館高等学校には5つの科・コースがあります。国内・国外の難関大学への進学を目指す英語科、普通科の下に4つのコース「医進サイエンス（医進）、スーパーV、特別進学、進学」があります。

英語科では英語に関する授業が全体の三分の一を占め、二年次には1年間の留学が必須となっています。留学先では現地の生の英語に触れつつ、多様な選択授業やサーフィン、犯罪捜査などの活動を行います。留学から帰ると皆、TOEICの平均スコアは700点を超え、トップ層は950点近くになります。

普通科の医進コースは少人数クラスでの授業を展開し、医歯薬学部や東大・京大などの最難関大学の理系学部を目指します。勉強の強化部でありながら、漁船に乗って海に出る海洋教育などのフィールドワーク活動もありま

す。また、年次を超えた合同合宿などもプログラムされています。

スーパーVコースはサッカー部、吹奏楽部などの強化指定部活動などに取組みながら難関国立大学や難関私立大学を目指すコースです。現役での合格にこだわり、部活動やボランティアなど多様な学びで文武両道を目指します。



スーパーVコースの授業風景

特別進学コースは部活動を行いながら国立大学や難関私立大学合格を目指すコースです。コースに所属する8割の生徒が部活動に所属し、プロサッカーチームのユースクラブなどに参加しながら、勉強に励む生徒もいます。進学コースは基礎学力の定着を目指しながら、私立大学、短期大学、専門

学校などの生徒の多様な進路ニーズの実現を目指すコースです。週5日間の授業で、土曜日は社会貢献活動や部活動に専念できます。また、情報処理演習やフードデザインなどの豊富な授業を展開しています。

学芸館高校ではコースごとの「タテ」の結びつきがとても強く、年次を飛び越えて行うプログラムが多数あります。先輩への憧れで進路を見つめる生徒も多く、代々受け継がれている「文化」となっています。



海外研修 (ミャンマー)

また、英語科、普通科の医進、スーパーV、特別進学、兄弟校の清秀高等学校はSGHに指定されています。SGHではコースの枠を超え、「発展途上国（カンボジア）における貧困の悪循環を是正するために高校生ができるこ

と」をテーマに活動します。高大連携授業を受け、課題研究活動（ゼミナール）、カンボジアフィールドワーク、カンボジア合同研修会、ソーシャル・リーダーシップ・キャンプで共に学び、グローバルリーダーになるための資質・能力を養います。

このSGH以外にも、部活などで他コースの生徒とかかわる機会も多く、「ヨコ」の結びつきも生まれ、「タテ」と「ヨコ」の多様で深い人間関係を築くことができます。



カンボジアフィールドワーク (SGH)

【教員制度】
2代目校長の森靖喜氏が25年前に「進学校に変える」と舵を切ったことが現在の学校の原型となっています。当時は公立の補完校というポジションか

ら抜け出せずにいましたが、生徒第一主義や顧客満足主義のSI（スクール・アイデンティティ）を掲げ、校名も変更しました。この改革が成功し、現在の学芸館の姿ができました。校名と制服を同時に変更した直後は、受験者が大きく増えましたが、進学実績が振るわなかったためまた低迷の時期を迎えました。抜本的に教育の中期を変えるには教員を変えなければならぬと決意し、新しい教員だけでなく、コンサルタントや元塾講師など新たな人材も迎え入れ、現在の良い雰囲気を作り出しています。教員の中には、一度民間企業で揉まれ一回り大きくなって母校に戻ってきた卒業生も多くいます。

現在は1教頭5部長（入試広報、生徒指導、進路指導、総務、教務）体制を敷いており、各部長が責任をもって各部門を統括しています。校長からのトップダウンではなく、また優秀な中間管理職の先生が若手の意見を吸い上げ、皆が活発に意見を言い合える関係になっています。加えて、部署別の朝礼などもあり、各部署がイニシアチブをとれるシーンを設けています。

【取材を終えて】
今後の展望を校長先生にお伺いしたところ、「AIが浸透してくる近い将来に向けては、外国語がただ話せる人間ではなく、その土地のカルチャーやバックグラウンドを理解した上でコミュ

ニケーションがとれる人間が求められる。」とおっしゃっていました。時代は大きく変化していますが、学園の根幹である「英語教育」をさらに充実させることで、来たるAI時代に世界で活躍できる人材の育成が期待されます。

(取材) 私学経営情報センター